

## 【東京国立博物館】(計1件)

<染織> (1件)

1 名称	[重要文化財]小袖染分縷子地小手毬松楓模様 (こそでそめわけりんずじこでまりまつかえでもよう)	品 質	縷子(絹)、刺繡、鹿子絞、縫締絞、摺箔
作 者 等		員 数	1領
時 代	江戸時代・17世紀	寸 法 等	丈138.4cm, 衿 57.0cm
作品概要	<p>卍繋ぎに牡丹と蓮華の折枝紋を散らした中国産の縷子に、縫い締め絞りの技法で紅・黒紅・白の三色に染め分け、更に鹿の子絞りや刺繡で模様を表した小袖である。黒紅に染めた部分には、型紙と金箔を用いた摺箔の技法で雲や霞、松葉などの模様が捺されていたが、今はすっかり擦り落ちており、かろうじて糊の跡が見える。かつては、色とりどりの刺繡に金箔が輝く、豪華な小袖であったと考えられる。</p> <p>地を埋め尽くすように様々な技法を凝らして模様を施すことから「地無」と称された小袖は、江戸時代初期には礼装用の晴れ着として用いられた。松や桜、楓といったお馴染みの模様のほか、安土桃山時代から江戸時代初期にかけて好まれて模様に表されるようになった小手毬の花が刺繡で表される。巴紋や鶴丸紋、有職風の入り菱模様など、部分部分を見れば細かな刺繡に彩られるが、遠目に見ると、複雑で明言し難い染め分け模様の中に、橋が大きくかかり、全身が一枚の風景画のように見えてくる。慶長期から元和期にかけて主流であった段や筋といった区画を重視するデザインから、万治期から寛文期にかけて花ひらく絵画的な構図へと転換する、過渡期的な意匠と位置付けられる。明治期以降、長らく「慶長小袖」と呼び慣らされてきたデザイン様式であるが、その技法的特徴や小袖の形態から、実際は正保期頃に位置付けられるべきである。</p>		
購入金額	88,000,000円		

